タイトル：2023 年度 教育セミナー（第 19 回）
日時：2023 年 9 月 21 日（木）～24 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「ヨルダンにおけるミュージアム認識と利用―制度的背景を踏まえて―」
山口舞桜（慶應義塾大学文学研究科修士 2 年）

この度、2023 年度中東☆イスラーム教育セミナーに参加させて頂いた。私は①似た分野の先生方と院生から発表へのコメントをもらうこと、②関心ある先生方の発表を聞くこと、③同じく修士の学生として頑張っている学生たちとのネットワーキングを主な目的として参加した。実際に、上記のどの点においても参加してよかったと思える 4 日間であった。

まず 1 点目に、修士論文執筆に向けての研究発表へのコメントについて、有意義なコメントを多く頂けてありがたかった。普段周りに中東・イスラーム研究を行っている人がいない環境にいるので、発表自体がとてもしやすい雰囲気にあったのも感動もので、本当によかった。また、私は文化人類学・博物館学を専門にしているが、歴史学や政治学の方からもコメントを頂くことで、様々な面から研究を見直すことが出来、どのような構成で発表すべきかや研究デザインの観点でも参考になった。

2 点目の先生方の発表について、各先生が現在進行形で進められている研究がどのように意図し、あるいは意図していないなかで、組み上がり、このようなことが言えそうである、というお話を聞くことが出来た。現実的にどのように研究者が研究を積み上げていくのかや、先生方の問題意識、ダイナミックな展開を学ぶことができる貴重な機会だった。先生方が悩みながら研究を推し進められている過程を見ることが出来る機会はなかなかないので、これから発表されていく内容のレジュメを見ることが論文を組み上げる上での参考になったし、そのレジュメへの他の先生の遠慮ないコメント、そして起こる議論はとても面白く、心躍るものだった。私も頑張らなくてはと励みになった。特に近藤信彰先生の外交史そのものを問うような議論は「歴史学からこんな議論が、大きな提案が出来るんだ」と感動、とても鼓舞されたし、藤屋リカ先生、床呂郁哉先生の発表からは色々なキャリアの歩み方があるのだと強く感じられ、またそれぞれの場所から見える世界を発信することの大切さも改めて噛み締めた。小倉智史先生の発表では、学問が社会に何が出来るかを具体的に提示してもらったと思う。今回参加してくださった先生方は総じて、研究者の発言は力を持つことに意識的であり、平和や信頼や公正でないことなど、社会に現れている普遍的で根深い問題を念頭において真摯に取り組むこと、楽しむことも忘れないこと、といった大切で、尊敬できるものを持っていらっしゃるように感じた。私も現代社会への様々な問題意識があって中東・イスラーム領域の研究に行きついた身であるので、先輩研究者である先生方がそういった心意気を持たれていることに勇気をもらった。これからも

頑張っていこうと思える今回のセミナーであった。

3点目に、近い分野の修士の学生と繋がれたことも本当に大きな財産となっている。今ガザのことで辛い日々を送っているが、私たちが立ち上がらねば、とSNS等で情報発信が出来るのは、彼ら彼女らと繋がり、共に深い悲しみと知識をある程度持ったうえで強く問題意識を共有出来ているからだと感じている。仲間がいる心強さは計り知れないものがある。

このように、私は本セミナーに参加することで具体的な研究への示唆を得ることが出来、研究の厚みを現在進行形で増し続けている先生方の背中を見ることが出来、得難い仲間と繋がることが出来た。参加を迷っている方がいたら、ぜひ挑戦してもらいたいと思う。

最後に、学生たちに真剣に向き合ってくださった先生方、ともに頭を絞った学生の皆さん、そして事務局として運営を進め、いつも丁寧なメールのやりとりをしてくださった千葉さま、この機会に参加することが出来て本当によかったです。ありがとうございました。